



特別
子 12
3643
16(15)

紅
白





第三 雨月

心ささるる雲水づく行場や

成らん 早初 是ち暖城の奥より住居す

西行法師あり我宿所の子細あり

うらむと住吉の明神より急務は

ウヤ住ち 先 ちの野乃奥を立ち出づく

西よりあり秋乃月とゆく急の



志多ふあつた務殿乃由津の浦つらひぬ
 ぬ儀ささけもりや後乃にけりきよ
 けりしくカ急ん程よ具いとも後う
 に急てん我地前よあがり家かこそ
 ささけりありまら程いとも日ひき
 て後よたきさるに釣殿乃海り
 こそゆりくそ火れきり乃らそて後

ほととぎす宿乃うらまをとおまひ
 風枯木を吹く暗天乃雨月平沙と
 照さる夏乃あつ霜うたふある秋
 乃空乃り子堪の半乃月荒面白の
 物うらま早あつた此屋乃うらま案内
 申乃シテ泣きく満りゆそ早行書
 たる修乃去うしとあ乃宿と出借

才の住居さも 賤う行路をさす
ぞわづら賤うの心さす 葺そよ
露の面也則奇の下の白あり 露上
乃白さつらきぬも 宿さつら申
海 小夜神私奇乃心を理り
をわづら出る月漏ぬさたまれと巻
子角に 賤う行路をさすさつら
上三九

月漏雨さたまれと巻にくよ 賤う行
端を葺そわつらぬ 面白れと乃
紫やぐに理りさつら夜乃月とさ
思り雨をさつらぬもぬ人さつらぬ
つらきぬもや物し秋なるさく
三五あや乃新月の二千里さつら
そ心さつら秋の雪雨ハ又清湘乃よ

おのあらしを思ひて あり村にぬれ

あらし 夕村雨の園ゆらそやと

里小群乃嵐やらし 能くまけの時

雨ふるそて 文のきた秋の物れ 行路

乃松よ 吹あらしそや 雨あらしる

あらしきら 吹のあらしれ吹落る

中くあらしるる 乃前あらしる

月とま 乃あらしもまけとく 園乃物

端の松の風あらしとま 乃岩乃浪

そほとあらし 能寝のまそめるあらし

むかしとくそ 接枕さらしも 後へよ

そあらしとく 礎とくよ 侍あし

礎とくよ 乃母のわらと 賄乃あらし

風あらしとく 衣摺がれ 乃さそ

あつて秋のうらみは夜月に入
てらにふよヤラハ雨きのあき時
あまね木の葉の雨の音はたの
しみつとささ心とそめくは
ホホ葉夜の秋の露をのり守
月うきにまねてたつらまら葉の
色あまらねらりひられは

の葉をうら集め雨の名跡と思ふ
もや夜をうらり旅人を御侍
家へえまをうらりも津守の射
まれの秋は老衰の秋なり
よのさる古へと松うね枕して
ゆやまをうら後三上ね
懐吟やる陰陽二の巻道

ぞろをわたりて又所をくまふ
金水ありて下へ則天地入れ
是神也と云く我をいれ
思ふがごとく西乃海あり
うまの故國あり地あり
まゝなり神也と云く
さきにお此神の周位をまゝ

およびて都率の院にて高貴
徳王菩薩と号し今又玉垣の
ちの國に跡をたれ和奇を守りて
まゝのまゝ松林なりと云く
志く佛像を造る家よ和奇の人稀
るお家よ西行法師をたれ
まゝのまゝと云く和奇の友と云く

觀世流うた水賣弘廣告

右諸本八段集、山本長兵衛所有、元治元年七月京都大火、初土蔵に焼失、依て之を
保版に殘燒失、故に山幸版本彫刻可成、知不、其意、同刻難出来、每據我、亦方、引
受、存、其、其、後、長、兵、衛、死、去、山、本、絶、家、相、成、其、有、觀、世、流、元、新、版、預、出、知、觀、世
家、元、亦、右、諸、本、亦、來、數、十、年、の、星、雲、也、種、系、從、以、致、正、當、補、找、加、一、印、刷、以、附、其、也、紙
悲、之、明、治、十、年、第、三、世、觀、世、流、元、授、合、際、と、相、成、版、本、彫、刻、可、成、有、分、同、年、以、來、新、版、彫、刻、在
於、私、店、販、賣、の、旨、右、諸、本、其、書、名、前、出、一、段、と、何、年、間、向、外、傳、及、傳、奉、授、上、所

一 大本 壹番綴

壹冊二分 代價金

右諸君、諸好、存、護、愛、任、尚、又、向、外、傳、水、之、旨、不、是、有、し、如、以、是、次、第、是、本、仕、在、旨、性
用、向、傳、奉、授、上、所

山本長兵衛後傳

觀世流諸本根元 二條通御幸町西入 檜 常 介

明治十六年十月

